

「場所に根ざす教育」に関する一考察 A study of “Place-Based Education”

中 野 和 光

キーワード：場所に根ざす教育、グローバル経済、教育のグローバル化

1 はじめに

グローバル経済が地方の地域社会を直撃している。地方の人口の都市への流出が止まらない。教育のグローバル化が進んで、世界の多くの国で、言語、数学、理科、情報技術、外国語（特に英語）を中心として、コンピテンシーを重視したスタンダードとアカウントビリティに基づくカリキュラム改革が行われている。コンピテンシーを重視したカリキュラムは、グローバル経済において成功的に生きる人材を育成することを目指している。このことも、若者の都会への流出に拍車をかけている。

歴史的にみると、都市の労働力の準備として、学校教育が機能したことは事実である。このことは、教育実践においても意識されていた。たとえば、東井義雄は、『村を育てる学力』（1957年）の中で、次のように述べている。

『『学力』に地域性を認めまいとする人たちは、前にも述べたように、『意識の都市化』の側から、『学習の主体性』をかりたてようとする。村の子どもたちの希望を、都市の空に描かせることによって、『学力』の昂揚をはかろうとする。この立場からは、『進学・就職指導』が第一の大きな実践的問題になることは当然である。

しかし、ここに問題はないであろうか。村の子どもたちの大半が、やがて都市に移行しなかったら、村そのものの生活も成り立たない、といわれるような現状

の中では、この道が、学力昂揚の唯一の道であり、村の子どもたちをしあわせにする道であるようにも思われる。しかし、私は思わずにはおれない。このような、『村を捨てる』立場から育てられた『主体性』が、『村を捨てる学力』を形成していくことは必然的だが、果たしてそれでよいのか……と。」⁽¹⁾

東井は、このように述べて、「土」を愛し、「村」を愛する「村を育てる学力」を育てようとする。

臼井嘉一は、『戦後日本の教育実践』（2013年）の中で、D.グルーンワルドとG.A.スミスのPlace-Based Education in the Global Age(2008)を引用して、「〈場をもつ主体〉をそだてることについて考えてみると、戦後日本教育実践史においても、郷土教育実践、生活教育実践、生活綴方教育実践として展開されていたのではないかと捉えうる。」⁽²⁾と述べている。

「場所に根ざす教育（place-based education）」とは、臼井のこの指摘のように、戦後日本教育実践史における郷土教育、生活教育、生活綴方教育の米国版である。

本稿は、今日、米国を中心として展開されている「場所に根ざす教育」の理論と実践を検討し、その教育学的意味を明らかにすることを目的とする。

2 教育における場所の意味

最初に、教育における場所の意味について検討してみたい。

1. 場所の意味

1) 場所の生物学的意味

場所は、生物学的には、生命体を選んで居る居場所、生活の場、「ニッチ」である。動物も植物も、生命体は、生き続けるために、その居場所を確保する⁽³⁾。

2) 場所の現象学的意味

現象学者は、人間の主観的な場所の経験を問う。人間であることは関係の中にあることである。その関係を知ることは、人の空間の感覚を述べることである。第一次的空間関係は、われわれの世界への方向付けの関係である⁽⁴⁾。

現象学的視点からは、場所は、充足されるものではなく、住まれるものである。シェルターを見つけ、空間を配置する。その設定に意味を見つける努力は意図的である。直接的知覚、記憶、予測、希望、すべて、この経験の歴史的豊かさに貢献する。個々人の経験は主観的でも、客観の中に意味の統一を追求する⁽⁵⁾。

事物だけからなっている町を視覚化することはできない。しかし、それらの事物を経験する個人は、それらを意味あるものと見る。場所の意味は、物理的設定、事物、活動の中に根ざしている。しかし、それらは、事物の属性ではない。それらは人間の意図、経験の属性である⁽⁶⁾。

3) 場所の人文地理学的意味

人文地理学は、人々が場所を通して、自分のやり方を構成する過程を明らかにすることを主題とする⁽⁷⁾。

4) 場所の社会学的意味

自然環境は、三次元のシステムとして理解しうる。社会的政治的経済的文化的社会関係の情報を伝達するテキストである。場所は、個人を保護するシェルターであると同時に生活様式を伝達する。場所は、批判的社会学の対象でもある。批判的社会学の目的は、社会の中の権力関係をあらわにすることである。自然環境は、社会学的テキストとして、不平等と支配にかかわったところとして解釈される⁽⁸⁾。

2. 教育における場所の意味

人間はいずれかの場所に生まれ、いずれかの場所で育ち、活動する。その場所は必ず特定の場所である。人間は必ずある場所にいる。人間は、その場所を、経験、意図に基づいて意味づける。その意味づけは、成長とともに変わる。場所を意味づけて生きているということ自体は、何歳になっても変わらない。学校も場所の一つである。

3 場所に根ざす教育の理論

1. 場所に根ざす教育の先行事例

場所に根ざす教育は、我が国の教育実践史の中に先行事例があるように、米国においても次のような先行事例がある。

地域社会にもとづいた教育
環境教育
持続する発展教育
野外教育
生態学的教育
問題解決教育
サービス学習
等⁽⁹⁾

2. 場所に根ざす教育の定義

場所に根ざす教育は、これらの先行事例と重複する部分が多い。場所に根ざす教育の固有の定義はどのようなものか検討してみよう。

ソーベル David Sobel は、次のように定義している。

「場所に根ざす教育は、言語、数学、社会科、理科、その他の教科の概念を教えるのに、出発点として、地方の地域社会と環境を使用する過程である。手作り、現実世界の学習、経験を強調して、このアプローチは、学業成績を向上させ、生徒と地域社会の強い結びつきを助け、生徒の自然世界の理解を向上させ、能動的貢献的の市民として奉仕への高揚した関与を創造する。」⁽¹⁰⁾

「田舎の学校と地域社会のトラスト(Rural School

and Community Trust)」は、次のように定義している。

「場所に根ざす教育は、地方的なもの独自の歴史、環境、文化、経済、文学、特定の場所の芸術—に根ざす学習である。地域社会は、学習の文脈を用意し、生徒の学習は地域社会のニーズと関心に焦点化し、地域社会の住民は、教授と学習のあらゆる側面において資源とパートナーとして奉仕する。この地方的焦点化は、生徒を、知的厳密さと現実世界の関連性を学問的に対応させ、率直な市民性を促進し、選んだいかなる地域社会においてもよく尊敬し、生きることの人々を準備させる。」⁽¹¹⁾

3. 場所に根ざす教育の理論

では、場所に根ざす教育は、どのようにして、衰退した地域社会を活性化しようとするのだろうか。

クレッチマンら John P. Kretzmann and John L. McNight らは、次のようなアプローチを説明している。

荒廃した地域社会に対するアプローチには二つの方法がある。一つは伝統的なニーズ地図法である。この方法は、ニーズを必要とする地区や人々の地図を作る。その人々に、問題の性格を教え、サービスの価値を教える。その人々はサービスの消費者である。その人々はニーズ地図を受け入れる。自分たちは、欠陥があり、犠牲者であると考えようになる。地域社会はほとんど無限の問題のリストを作るようになる。予算は住民ではなく、サービスの提供者に向けられる。予算を獲得するために、住民の能力や強さではなく、住民の問題や欠陥を強調するようになる。外部者だけが援助を提供できると思えるようになる。依存のサイクルを深化する。生存を保障するだけである。

代替のアプローチは、人々の能力、技能、資産 (asset) にもとづいた政策と活動をとる。地域社会の住民、団体、機関という資産の地図をつくる。地域社会の資産に焦点化し、関係によって推進して、地域社会を発展させようとする。外部の助けではなく、住民と地域社会自身が努力するときのみ地域は発展すると考える⁽¹²⁾。

場所に根ざす教育は、この第二のアプローチである。

では、スタンダードとアカウンタビリティの時代になぜ場所に根ざす教育が必要なのだろうか。このことについて、スミスとソーベルは、次のように説明している。

- 1 直接経験から切り離された教育は、大多数の生徒を学習に失敗させる。
- 2 若者を社会的連帯に関与させる機関の欠如は、民主的な制度の長期的な活気を脅かす。
- 3 今日の社会の持続可能性は、環境の倫理の形成を必要とする⁽¹³⁾。

4. 場所に根ざす教育の方法

スミスとソーベルは、場所に根ざす教育の基礎として次のことをあげている。

- 1 地域の住民を学校へ
- 2 地域の組織との連携
- 3 学校と地域社会の計画活動の開始
- 4 地域社会に根をおいたカリキュラム
- 5 教師をカリキュラムの設計者とする
- 6 生徒に知識の創造者となる機会を与える
- 7 生徒の能力と声を養う
- 8 生徒に学校外の大人とのつながりを作る⁽¹⁴⁾

4 場所に根ざす教育の実践事例

地域に根ざす教育の実践事例を挙げてみよう。

1995年、南ダコタ州ハワード学区は、学校と地域社会を結合する試み「アンネンバーグ農村の挑戦」を始めた。その試みは、次のような考えに基づいていた。地域社会はその維持に変化を必要とする。若者は変化に開かれている。大人は若者に耳を傾けなければならない。

最初に、学校の中に「農村資料センター」が設置された。生徒、教員、地域住民が、年間を通して、主題を決めて話し合った。あるプロジェクトでは、生徒たちは、地域の経験豊富な人にインタビューしてその結果をセンターに展示した。「未来のビジネスリーダー」というプロジェクトでは、生徒たちは、住民がお金を

どこで使っているか、住民の地方のビジネスに対する見方、税収を増やすための販売法を調べた。翌年、地域内の販売額は劇的に増えた。生徒が企画した成人コンピュータ講座は、多くの参加者があった。生徒企画の温室、野菜園もあった。地域の未来を語る集会も持たれた。若者、年長者、農民、ビジネスに携わる人、牧師、教師、が集まった。

このような試みは、テキサス州、西ヴァージニア州、南カロライナ州、ミシシッピ州、など各地で行われた。これらの試みで得られた教訓は、次のとおりである。

- 生徒、教師、教育活動家は、資産に基づいた地域の経済的発展にとって重要な協力者である。
- 地域発展の民間団体は、地域の小さな学校と教師との協力の便益について教育される必要がある。
- 農村の学校と地域社会の発展のモデルは強固な調査とさまざまな方略の効果の評価に基づいて実施される必要がある。
- よい学校の精通した、効果的な、永続的な支持者となる農村の住民のスキルを形成することは、更なる発展のための地域の資産の形成を助ける⁽¹⁵⁾。

州全体で場所に根ざす教育に取り組んだ実践事例を挙げてみよう。

アラスカ大学フェアバンクス校は、20年間にわたって、原住民と交流する1週間の夏季講座を行っていた。1995年、アラスカ大学は、アラスカ原住民連合と「アラスカ農村体系的戦略（Alaska Rural Systemic Initiative）」を立ち上げた。その目的は、アラスカの原住民の知識体系と認識方法を学校のカリキュラムに組み入れることだった。アラスカ原住民は過去6世代にわたって、否定的な取り扱いを受けていた。他の団体の協力を得て、5つの地域に住む16の言語的に文化的に異なる集団の伝統的価値観、認識の方法が調査された。それらは、家族、言語/コミュニケーション、部族社会、健康、生活、野外の生存、生存、実業、応用技術、エネルギー/生態学、探検、の12の主題をもとに、6つのレベルの螺旋的なカリキュラムとし

て構成された。

一つの教科として地方文化を教えるのではなく、すべての教育の基礎として地方文化が位置づけられた。すべての知識の形態、認識方法、世界観は、同等に妥当であり、適応し得、相互に利益のあるやり方で補完的であると認識されるべきであることが意図された⁽¹⁶⁾。

学区や、州全体の取り組みではなく、学校単位の実践事例を挙げてみよう。

メイン州の島にあるヴァイナルヘヴン学校は、つぎのような場所と地域社会に基づいたカリキュラムを作成している。

幼稚園—第2学年 栄養と地域社会

理科の時間に、教師は「体によいおやつって何？」と聞く。「例を挙げて」「なぜよいの？」「どうしたら見つけられる？」「お菓子とりんごどどうちがう？」教師は、毎日、算数の時間に、体によいおやつを棒グラフで示す。

教師は、さらに、子どもたちに体によい食事を作らせて、老人ホームに届けることを計画する。子どもたちは、食事を計画し、成分のリストを作り、買い物に行き、食事を作るのを手伝って、老人ホームの高齢者のところに届ける。買い物に行く前に幼稚園の教師は、教室の中にお店を作って、予算内で買い物をすることを教える。

第3—5学年の地質学の授業でも、学校外の地域の岩石、鉱物、土の調査と教室の中の授業が結び付けられる。

第6学年の海洋科学の授業でも、赤潮の調査を行い、学校外の地域の調査と教室の中の授業が結び付けられる。

ハイスクールでは、美術、音楽、演劇、フランス語の教師が、歴史協会と協力して、共同墓地に埋葬されている人々の職業等を調べ、その調査にもとづいて、第一人称の独話の形で、島の歴史の物語を書かせている。生徒は書いた作品について相互に批評しあい、誰がそれを演ずるかを決め、衣装を作り、演ずる。音楽の教師は、島の人によって書かれた歌を第5学年の児

童に歌わせる。地域住民も参加する⁽¹⁷⁾。

5 「場所に根ざす教育」の教育学的意味

場所に根ざす教育は、経済のグローバル化にともなう、経済成長のための教育において、商品生産のための技術的スキルとコンピテンスの重要性が強調されることに対抗する教育という側面がある。教育のグローバル化を支えている新自由主義は、歴史的的要因は、市場の機能にとって偶然に過ぎないとし、学校の位置する地域の歴史的的要因は無視して、市場の求めるコンピテンスを育てたかどうかをスタンダードとアカウンタビリティで管理しようとする⁽¹⁸⁾。これに対して、場所に根ざす教育は、学校の位置する場所の歴史を大切にし、地域社会の資産と協力して教育活動を行おうとする。また、狩猟民族の知識形態や認識方法も、現代科学技術の知識形態と認識方法も同等に妥当であるとする。

一方、アラスカ原住民の知識体系と認識方法が、アラスカ州のカリキュラムのスタンダードとして組み込まれているように、今日の米国のスタンダードとアカウンタビリティに基づくカリキュラム管理という政策とまったく対立しているわけではない。場所に基づく教育は、地域社会の資源と結合した学習を展開することによって、学力の向上を図るという側面がある。このことは、「生活の論理」によって学力を育てようとした東井と同じである。新自由主義の教育政策の側も教室の外と関連付けた学習を推奨している⁽¹⁹⁾。この意味では、場所に基づく教育と学力向上政策とは補完的である。

では、場所に基づく教育の新自由主義的教育政策への対抗でも補完でもない固有の意味は何であろうか。

アンフリー Michael L. Umphrey は、次のように述べている。

「教育と場所の形成は、同一の過程の二つの側面である。人生の主要な目的の一つは、われわれが住んでいる場所をよりよくすることである。それは、現実との知的交流を通してのみ達成しうる目的である。」⁽²⁰⁾

場所に根ざす教育の実践事例に見られるように、場

所は、学区、校区、州全体と狭くも広くもとりうる。この意味からいうなら、私たちの住んでいる地域社会も国も地球も場所である。場所に根ざす教育で育った子どもたちは、将来、どの場所で生活しても、その場所を大切にすだろう。アラスカ原住民の知識形態と認識方法は現代科学技術の知識形態と認識方法と同等であるという視点は、科学技術に基づいて新商品を開発し、より便利な生活という生活様式は、場所における生活様式の一つに過ぎず、無限に続くものではないということを示している。

註

- (1)東井義雄『村を育てる学力』明治図書 1957年 173 ページ
- (2)臼井嘉一編著『戦後日本の教育実践—戦後教育史像の再構築をめざして—』三恵社 2013年 258—261 ページ
- (3)西山賢一『文化生態学の世界』批評社、2002年 20—21 ページ
- (4)David Hutchinson, *A Natural History of Place in Education*, Teachers College Press, 2004, p.13.
- (5)Ibid.
- (6)Edward Relph, *Place and Placelessness*, Pion, 1976, pp.42-43.
- (7)Hutchinson, op. cited, p.14.
- (8)Ibid., pp.14-15.
- (9)Clifford E. Knapp, *Place-Based Curricular and Pedagogical Models; My Adventures in Teaching Through Community Contexts*, in David A. Gruenewald and Gregory A. Smith ed., *Place-Based Education in the Global Age*, Routledge, 2008, pp.5-27.
- (10)David Sobel, *Place-Based Education*, The Orion Society, 2004, p.7.
- (11)Gregory A. Smith and David Sobel, *Place- and Community-Based Education in Schools*, Routledge, 2010, p.23.
- (12)John P. Kretzmann and John L. McNight,

- Building Communities from Inside Out-A Path
Toward Finding and Mobilizing a Community's Assets, Institute for Policy Research, 1993,
pp.1-11.
- (13)Smith and Sobel op. cited. p.32.
- (14)Ibid, pp.16-20.
- (15)Rachel Tompkins, Overlooked Opportunity-
Students, Educators, and Education Advocates
Contributing to Community and Economic
Development- in Gruenewald and Smith, op.
cited, pp.173-195.
- (16)Ray Barnhardt, Creating a Place for Indigenous
Knowledge in Education; The Alaska Native
Knowledge Network, In Gruenewald and
Smith op. cited, pp.113-133.
- (17)Smith and Sobel, op. cited, pp.131-147.
- (18)N. P. Stromquist, Education in Globalized
World- The Connectivity of Economic Power,
Technology, and Knowledge, Rowman &
Littlefield, 2002, p.27.
- (19)Joel Spring, Globalization of Education- An
Introduction-, Routledge, 2009, p.48.
- (20)Michael L. Umphrey, The Power of
Community-Centered Education- Teaching as
a Craft of Place-, Rowman & Littlefield, 2007,
p.xx.